

‘呪われた血’の叛逆詩人 (6)

George Gordon Byron

楠 本 哲 夫

目 次

第四章 華麗なる憂愁

本稿のテーマは

——詩人バイロンが The Grand Tour (Ist) より帰国，“チャイルド、ハロルドの巡礼記”の出版により一躍，詩界，政界，社交界の若きプリンスとして世の脚光を浴びつつも，詩人の心の奥深く喰い入る憂愁のルーツをさぐること——である。

“私の前途は、さほど希望にみちみちにもものではないとしても、私は、私の隣人たちのすべてのものの如く、私の人生ととっくみ、格闘してゆかねばならない。”

Grand Tour の旅先より Byron は母あてに、そう書き送った。

詩人に最も近い、最もいとほしい人々という意味での“隣人”たちが、おのが生涯と取組み、死と格闘し屈伏していったとき、詩人の前途は実は洋々たるものであった。めくるめく希望にみちたものであった。だがしかし、彼が“This tight island”と呼んだ“窮屈な、小さな島”祖国、英国に、Grand Tour より帰国して、やがて、祖父母の国を“noose”（輪^わなわ—死刑の具）の如く窮屈に感ずるのである。

8月7日（1811年）詩人は Newstead から Scrope Davies 宛に、“私と私の周辺には、ある呪がたちこめている。”と書いた。

詩人の母は、Grand Tour よりの帰国を待たずして他界し、数日を経ずして、

あの陽気な Mathew は Cam 河で溺死し、Long は海上で溺死した。この年の5月、Edleston も胸を病み、すでに他界していた。

“死には、私がこの問題を口にするこゝも、考えるこゝもできないほど、私がどうしても理解できない、なにものかがある。” と親友 Hobhouse に書き送った。

Francis Hodgson 師は、しかし、詩人に対して、死を口にし、考えることは、どちらも、是が非でも、やらねばならぬことであると力説した。

詩人は Voltaire 研究の徒として宗教論には卓越していた。詩人は死を窮極の目的と考えていた。キリスト教徒の唱うる靈魂の不滅を嘲笑した。そしてその考えを Hodgson 師にもらしたこともあった。

“私の心の中には、私のふり払うことのできぬ異教徒がすむ。もしそうであれば、私たちの亡骸は——ふたたび蘇るといわれるが、——はたして生きがえるに値するのだろうか。もし私の亡骸が生きかえるとするならば、私はのぞむ——私が20年と2年余、私が歩んできたこの双脚が、もっと健全なものであってほしい——と。さもなければ、私は悲しくも、天国へ向かう行進におくれをとるであろうから。

1811年、暗い憂愁にみちた歳月、詩人が、身障者であることが、いつもより、より不気味に詩人の心に迫ってきたものと思われる。災禍がうち続くとき、身障者ゆえの傷口が、ひしひしと心に疼きを与えた。

Newstead の美しい小間使 Susan Vaughan が 詩人の庇護をはなれ、Robert Rushton—詩人の愛した小姓—のもとへ走り、その腕に抱かれたとき、こよなくわびしい、ほろ苦い盃を乾さねばならなかった。

“私は彼女を責めはしない。しかし私如き、身障者の存在が、そもそも、人から愛されるに値するのであろうか、と考えるときの、この私の空虚さは……”

無情な Susan が その後 腎臓血石で倒れたとき……

“もし、その石が、私の腎臓でなく、私の心臓の中に入りこんでいたら、その方がむしろよかったものを”とHodgson 師に書き送っている。

事実、その病石はすでに詩人の心臓の中にうちこまれていた。それは Cambridge 大学の頃より溺愛した Edleston の死によるショックであった。詩人はそのことを述べて

“五年前であれば、多感な私が涙したであろう、その涙の一滴^{しずく}だに、私にはもう残っていないのだ。——どのような悲しみに遭うようなことがあるとしても。だが Edleston の死は私の心臓に今なほ重苦しく食い込んでいる。”

しかし詩人は詩作活動のゆえにみづからの心臓から その病石を取り除くことができた。詩人が “Thyrza” (Edleston) への想いをよせた多くの詩をうたったとき、詩人の心は ^{あや}妖しく鼓動するのであった。しかし詩人は女の子の名前 Thyrza を用ひた。その理由は 彼の男色 (his love for a boy) をかくすためだったのである。Thomas Moore が Byron の伝記をかくようになったとき “Thyrza” への想のさまざまの詩は、Byron の、すべての失恋の情^{こころ}の混合物であったのだと述べている。

ここでも他の場合同様、Moore は、この点を如才なく、微妙に述べているが、Moore 自身も詩人として、ある単一の対象に焦点をしぼることのできない、また、ある単一の感情からインスピレーションを得ることができなかったためでもあろう。

Byron は 詩作により Edleston への悲しみを拭き去ろうとした。また、Augusta Leigh (異母姉) により ^{すがる} ことにより、母の死への悲しみ、そして罪の意識を ^{やは}和らげようとした。

詩人の二年余の外遊中、お互に音信不通であったのは、詩人が、Augusta の親戚、Lord Carlisle のことを ‘paralytic puling’——赤ん坊が ^{ギャーギャー}泣きたてる——という語を用いて評したことにより Augusta が立腹したためであった。しかし今や、Lord Byronこそ、Augusta から、^{慰められ}、^{あやし}

てもらはねばならぬ Baby Byron であった。

あの往時（1806年頃）の、愛にみちた活発な文通が また 二人の間に蘇ってきた。詩人は 母の記念かたみとして哀悼指輪ムーンストーンのmoonstone（月長石）のリングを Augusta に贈った。そして Newstead の彼の家に滞留するよう彼女を招いた。

詩人は、彼女が結婚したことを考えると、自分もまた、結婚することにより、今の苦悶から救われるかもしれない と考えるようになった。

“私の地位とひきかえに 富がころげ込むような相手が 誰か見つければ私もやがて結婚にふみきるだろう” と書き送っている。

こんな気持で Cambridge 時代の親友、Wedderburn-Webster の結婚を祝し “もし私が私の Coronet（貴族の宝冠）に充分な代価が支払って貰えるなら、きっと私は君のお手本に従うだろうよ。” と 彼に書き送った。“しかし、その場合、妻という存在が とても私を意気消沈させることは、必定であろう”とも書いた。

そして、これは、かつて Hodgson 師へ、詩人のもらしたことばでもあった。

倦怠感が詩人を包んだ。友人宛の手紙は、すべて ‘Yawning’ の連発のみで、‘Heigho ho’ のため息が繰返されるのみだった。

Cambridge 時代の学友を訪れても格別の新しい話題もなく、少年時代の母校 Harrow に遠出してみても救いはなく、23才にして、すでに70才の齢を重ねた如き、われ老いたりという倦怠感を深めるだけであった。

結婚に踏み切ることでもなくとも、もう一度東方への旅に出かけることが、笑いをとり戻す道であり、若さをとり戻す術ではないだろうか と真剣に考える。

ときどき、東方への旅が、あのなつかしいギリシャのことが 思い出されてしかたがない、退屈に閉された詩人の心境であった。

Susan Vaughnan によってうけた傷口が、づきづきとうづ疚き、耐えることを説く Hadgson 師にむかって “私は1813年の春、永久に故国英国に袂別を告げるだろう” ときっぱりと、その意中を伝えた。

しかし詩人は英国において、自ら克服しなければならない、自分の進むべき二つの世界を自覚し、はっきりと意識していた。

その一つは、英国の政界——英国議会で、獅子吼することが自分に適した道、そして“呪われた倦怠”を救う術である と詩人は自覚していた——であり、その一つは、詩人の前途に開かれた洋々たる文学の世界であった。

Childe Harold の出版の挙が進む一方、詩人の文学の世界への足固めが一步一步、進められつつあった。詩人の後援者が Thomas Moore であったことは、いかにも 詩人にとって幸運であった。

Thomas Moore は後に Byron の伝記を執筆することになった人だが、当時、人気を集めた叙情詩人であった。

Thomas Moore は——

‘English Bards’ による Byron の暴言、酷評に対し、最初は激怒し、Byron に血闘を申し込む気になったが、結局は Byron に心酔し、親友の Samuel Rogers (the Banker poet) と、Thomas Campbell と Byron と自分の四人で会食し、四人組 (the quartet) を結成すべく事を運ぶ労をとる。そしてその会食は1811年11月4日に決行された。Byron にとって、このことは、特筆すべき画期的出来事であり、大きな将来の目標を与えてくれることとなった。

この会食における Byron の、ふるまいと容貌は、皆の者に、すっかり好ましい印象を与えた。母の喪のため、優雅な黒の服を身につけ、この会に出席したことを歎びつつも、‘Melancholy Dane’ 憂愁なデーン人の印象を与えた。そして、ポテートとビスケットと、ソーダ水しか口にしなかった。

この新しく結成された四人組が、昔のケムブリッジ時代の親密な結びつきを完全に果しえなかったとしても、Byron にとって、やがて、Coleridge そして Wordsworth に近づくチャンスが与えられることになるのである。

Byron はこの新しく目芽えた、友情にみちた友、Moore を ‘the Irish Melodist’ とよんだが、親友の Hobhouse——そのころ Ireland にいたが——すら、その仲をうらやんだほどであった。

この強力な文学界の結束はちかに、Whig 党結社——Kensington の Holland House に通じていたが、そこでは、Rogers と Moore は親友であった。Byron は在野党に入党する。

Lady Holland は美しく、'威厳にみち、君臨した女王的存在' であり、Lord Holland はしかしながら Byron の政治的身分処理は Byron 自身の自由処理に委ねた。

1812年2月27日、詩人は 若き在野党議員、^{プリンス} 貴族 として、労働者による工場機械破壊行為を、死罪をもって処刑する政府議案に、真向うから反対する処女演説を行うことを決意する。

この決意が、単なる思いつきでなく、十分な根拠をもってなされたことは、ギリシャで書かれた詩人の 'Curse of Minerva' の詩の中に充分うかがわれる。

The starved mechanic breaks his rusty loom,
And desperate mans him 'gainst the coming doom.

飢えた機械工は、さびついたはた織機をうちこわす。
そして絶望の故に、未来の己が運命に^{きから}逆いゆく。

産業革命の進展につれ 労働者は、その犠牲となってゆくが 少数の者は泣き寝入りすることなく 工場の機械破壊の暴動をおこした。

機械化、自動化反対の 'Luddite' 暴徒が、1811年にはすでに Nottingham の靴下織工の間で立ち上っていた。Nottingham 出身の Byron は、Nottingham の the Recorder (judge) である Lord Holland に対し、“新しい機械1台毎に6人の織工が失職し彼等とその家族が飢死していく” 現状を力説し 訴えた。

熱血たぎるバイロンの烈しい気性は 人道を無視するこの政府の処刑案に対し、今や、怒り心頭に発した。

この問題をひっさげての、Byron の議会での処女演説は、謙虚さの中にも、大胆不敵の激しい口調で述べ立てられ——平素は20数名の議員出席者にもかかわらず、今回はその倍数以上の55名の出席を得て——在野党議員の拍手喝采の声を、そして Tory 党議員の罵声を浴びるという興奮のるつぽと化した、騒然たる議場を展開させた。

Byron は、労働争議鎮圧のために軍隊を用いることを烈しく批難し、その死罪判決申し渡し法廷を、かの悪名高き判事、Judge Jeffereys の統轄する ‘butchers’、屠殺者どもの集る屠殺場 であると声を高くして絶叫し、機械破壊者たちは、その罪を犯すべく飢餓状態に追ひやられるのであることを、理路整然と強い口調で述べ立てた。

英国議会史に残る名演説である。

かつて Byron が Helespont の海峡を泳ぎ渡ったとき、その壮挙の成功を祈りつつ盛んに声援を送った親友 Hobhouse が そこに居合せなかったことが残念であったとしても、しかし Byron の文学的助言者 Dallas が、議場で盛んに声援をおくってくれたことは心強かった。演説後、Byron に握手をもとめ、その演説が聴衆、議場に与えた興奮と高揚を賞め讃へ、その成功を心から祝福してくれた。

詩人自らも 認めた如く、ここでも “I was born for opposition” と叫んだ。Byron が反逆児、生れながらの反逆児であった面目躍如たる熱弁をふるった処女演説であった。

Byron の次の演説は——

その当時、闘われていた Catholic Emancipation の問題であった。

カトリック教徒も議席をもつこと——当時は身分的に禁止されていた——が許されるべきであるという、特にCatholic Ireland による強い要求であった。

Byron はこの要求を擁護し、激しく Tory 党の専横を攻撃し、議場が騒然となるほど獅子吼したけれども、結局、一票差でこの議案は否決されてしまった。

Byron の第三の演説は 1813年6月1日、‘the Liberty of the subject’ の演題のもとに、最も妥協を許さないものとして述べられた。

議会の改善を促進すべく創立された the Hampden Clubs の創始者 Major John Cartwright という中年議員が Huddersfield の軍部、行政長官たちと衝突していた。

彼と他6名が改革案歎願書に署名を集めている最中、逮捕されてしまった。

それは、言論の自由を明らかに禁止するものであり、同時に危険な、デモクラシーへの弾圧であった。

議会は 理論的には、言論の自由なきことを歎きつつ、一方、危険なデモクラシーへの弾圧は満場一致でこれを認めた。

1789年のフランス革命以来、democracy は、やがて1917年のロシア革命後 communism が意味することになったイデオロギーと、全く同じ意味をすずにもつようになっていたのである。

Byron は Stanhope と共に、全議会の反対の罵声をもものともせず勇敢に立ち向い、声を大にして、その非なることを攻めたて攻撃した。

しかし、Byron は華々しく政界に突入し、彼の天職であったかもしれぬ、その政界から、議会から、16ヵ月足らずで、何故に忽然と姿を消したのであろうか。

その答は——

Byron は、激しく追求してやまなかった人権と極端にまで尊重した貴族的基準との間に板ばさみとなり集中砲火を受けることになったためであろう。

Byronは——ほんの、ちょっとだけ——その生れ出る日が早かったのである。ほんの少しだけ、その時期を遅らせたならば、彼の正論が名演説として議会で開花し——あの、Byron が尊敬した後の英国宰相 Canning の政風を見事に醸し出していたであろうものを。

Canning は 詩人ならざるリズム作りの名宰相であった。だが果して政治家詩人なる生物が存在し得るものだろうか。

しかし、その答えがどうあろうと、Byron にとって、そのような問題はちっとも必要ではなかったのである。

何故ならば——Byron の萌芽的政治経歴は最早や既に、詩的遍歴にすりかえられてしまっていたのだから。

“I awoke one morning and found myself famous.”

“目ざむれば、一朝にして、我、有名になりけり。”とは、Byron の吐いた数多くの警句の中の最も人口に膾炙する名句である。

問題のその朝は 1812 年 3 月 10 日のことである。機をみるに敏な出版業者、John Murray II は、“Childe Harold’s Pilgrimage”（チャイルド、ハロルド卿の巡礼記）の予告文を、既に斯界の権威者に贈り届けていて、その前評判、関心はかなり高いものであった。そして、この日、この“巡礼記”が世に出たのである。

熱狂的に世界はこれを迎えた。出版 3 日にして 500 部を売りつくし、その月の終わりには 5,000 部を売り切った。そしてこの巡礼記の韻律は、英国全土に、ヨーロッパ、アメリカ大陸に、遠く Ohio の岸まで高らかに奏でられた。

Byron は、これが自分の死後の名声を確保する遺著となることへの自覚をこの瞬間、直観し得たという。

Georgiana Duchess (公爵夫人) of Devonshire は、その熱狂的歓声を次の如く評した。

“英国で Rousseau’s Confession(ルソーの^{さんげ}懺悔録)が初めて出版されたときの事情にとても似ている。Byron も Rousseau 同様、自分の犯した sin 罪を著者自らの口であからさまに^{あば}暴きたてることのロマン性が高く評価され、熱狂的歓迎を受けたのである。

しかし、両者の場合、相違点は、——巡礼記は、その歓迎ぶりが狂気の沙汰と思えるほどに、狂ひに狂ひ、エスカレートして、歯止めがきかなくなるほどであった点にある”，と指摘している。すべての大きな屋敷の内外で、劇場で、講演会で、Exter’ Change の動物園で、巡礼記の話題はもちきりで、詩人は、

その動物園の器用な印度象 Chune^{ee} を見ながら、この Chune^{ee} が自分の召使頭になってくれたらな— と実感したほど彼は歓迎せめに合い 身の置場もないほどであった。

Byron の住む No. 8. St. James Street は、詩人えの招待状を手渡すべく紳士、淑女の列と車で混雑し、交通は麻痺状態におちいったと云う。

1812年の春、詩人は、この巡礼記を世に出したことにより、若きプリンスとして社交会に君臨することになるのであるが、どんちゃん騒ぎ、酒宴、着飾った淑女、紳士からの讃辞の嵐を浴び、どの dinner table でも、詩人の名声、Byr'n……Byr'n……Byr'n……の、ささやきの聞かれない卓にはつくことができない程であった。

本邦の詩人、与謝野鉄幹が
 ……才たけて、みめ麗しく、情^{なさけ}あり……
 ……バイロン ハイネの熱^{うた}なくも……とバイロンの熱血を讃え謳^{うた}ったが、しかし、それは、憂愁のチャイルド——詩人バイロンが“呪^うわ^れた^星の^子”であることをも、示唆する叫びであっただろうか???

詩人 Byron につきまとう“華麗なる憂愁”の影……。それが、世人の心を強^{うたごころ}くうった、巡礼記の詩情なのであろう。

この熱狂的歓声の中にも、一際、目立って、痾高いソプラノがあり、それはまさに狂ほしく連呼された。それは Lady Caroline^{カロライン} の、狂ほしき嬌声であった。

当時、Whig 党の宰相候補一後に、宰相として在位6年間、若き Victoria 女王の adviser—として矚目された、—Lord Melbourn の長子—William Lamb の若妻であり、26才の美貌の才媛であった。

彼女の母は Bessborough の伯爵夫人であり、かの魅惑的 Devonshie の伯爵夫人 Georgiana の妹である。

Caroline は、すべての挙動において、つねに 小妖精のごとく tomboy——やんちゃな、お転婆娘——ぶりを奔放に発揮した。Devonshire 家の家系にみる “aristocratic bohemianism” 貴族的放縦主義の典型的な女性であった。

艶やかな薔薇の風情をたたえながら、彼女のハスキーな声は、社交会では一際 目立ち 注目を浴び 青磁の壺 の如く一見こわれ易く見え、しかも、ファイバ・グラスの如く、強靱な性格の持主であった。絵画の才に長け、詩文の才に長け、真のロマンチストでもあった。

彼女のニックネームは Young Savage やんちゃ娘, Devil (魔女), Squirrel リス, Cherubina 無邪気な天使, Ariel 空気の精, Fairy Queen 妖精の女王と多彩であった。

彼女は Byron に対しては 主として, a young Savage おきゃんな娘 として対することになるが、彼女の Ariel 空気の精 としての性格が Byron の the young Puck (いたずらっ子)——少年時代、彼はそう呼ばれた——気質と、マッチしていたのであるが……。

彼女の短い亜麻色のカールは 詩人の黒い巻き毛に向かって会釈し微笑みかけた。二人は互いに制御し得ない程に激しく情を交わし合うのである……しかし、二人は、出会うべき宿命をもちながら、融け合う宿命はもたなかった。

二人の初めての出会い——彼女が詩人を一目見たとき、彼女は、これ見よがしに、派手なヂェスチュアで くるりと、きびすを返した。誇り、自尊心を傷けられた Byron は、たちまち、彼女の好餌となった。

彼女は狂ほしい気持を日記に書いた。

“Mad—bad—and dangerous to know”

——どうかしてるワ。いけないことだワ。それは危険だとわかっているが……と。

その後、二人は Lady Holland の館で紹介された。

Byron は、早咲きの夏薔薇と エキゾチックな カーネーションの花束を Melbourne 家で彼女に捧げる。はじめて 詩人の口をついて出た言葉は

“Yonr Ladyship, I am told, likes all that is new and rare—for a moment.”

——やんごとなき貴女は、新しいもの、稀なるものは すべて——それがたとへ^{つか}東の間であっても——をこよなく^め賞づるお方だと、聞いております——

～for a moment～が paradoxically に やがて、大事件、歯止めのきかぬ、madな fatalな 深い傷口となりゆくことは、synicalな運命の神しか 知らぬことであつた。

Childe Harold と Byron が、Caroline Lamb の心に、妖しく、かきたてた、魔風、恋風は、東の間の色香を愛してほしいと Byron が贈った 早咲きの夏薔薇、エキゾチックなカーネーションの、うつろいゆく美を^{ところ}賞づる情とは異質のものとなつていった。

Byron の、甘い、かりそめの“戯れ言”に、カロラインは 呪文に縛られた如く、一瞬にして 妖精 Titania チタニア に化身してしまうのである。

かくて、the young Savage, Caroline は、この season の間ずっと、そしてその後も、詩人にまとわりつき、詩人をむしばみつづけるのである。

Byron は——いつの場合も——

薔薇は美しくとも、狂い咲く薔薇ならば、自の手で、その^{はなびら}花卉を荒々しく、もぎとり、おしげなく、ちぎり棄てたのである。

Caroline は、詩人の出席するパーティーには、^{たと}仮え招待されていなくとも、^{ベーチ}小姓の仕着で^{しきせ}変装し 詩人の馬車に乗込んだのである。

彼女が“あの蒼白い顔が私の運命をひきづって行くのだワ”と言つたことは、いかにもその通りになりゆくのであつた。

この憂愁の詩人の“顔”にのみならず、Childe Harold には、美しさと憂いの影が いくこにも 濃く漂っていた。

そして Caroline も この‘巡礼記’には、とびつき、これを、むさぼるが如く読み耽つた一人であるが、才女である彼女には、詩人と Childe Harold が全く同一人物であることをいち早く読みとつていたのである。

運命の美しさの漂う憂愁の影には 当然のことながら禍（兇運）を甘受せねばならぬ暗さと謎が秘められている。

これが——Childe Harold が、実在の人物であろうとなかろうと——終局的、不可避的 Byronic image, バイロン像なのである。

Byron は、実は、この Childe Harold を原型として、一連の類似作品、the Giaour, Conrad the Corsair, Lara の作品を、次々に世に送り出している。

社会からはみ出し、見捨てられ、追放されてゆく人間像——それが、基本的 Byronic hero であり、Byronic lover である。

Childe Harold は、自らの祖先の廟の中にかくまわれた ‘concubines and carnal company’——“妾たちとその肉欲的集ひ”——の中から、自らを追ひ立て、吹き荒ぶ^{すき}、荒涼たる世界に自らを、さらし者にした姿である。

the Childe Harold, the Giaour, the Corsair, and Lala が、皆、自らの追放者であったという意味で Byron 詩にみる主人公は、すべての叛逆児、破壊者、社会の敵を指揮し、烽火^{のろし}をあげた存在だったのである。

しかし Byronic hero は、つねに gloom 憂愁 の生んだ人物である ことは、見逃せない 大きな moment である。

さらに Childe には、mystery, secret woe, lineage long 栄光の遠き過去の血統 の image がつきまとう。

かくて、自らの孤独を追放すべく、詩人は Holland 家、Melbourne 家、Rogers 家、Sheridan 家、Mme de Stël 家を訪うのである。

それは他でもない、孤独をいやし、新風を自らに吹き送るためであった。

Childe Harold は、Byron は、所詮、世間からの追放者であった、しかも、世間はこれに迎合し、これをもてはやした。そしてこの矛盾^{はら}を孕みつつ、その傷つく、疚く心のままに一時、詩人は、積極的に遊蕩三昧に耽溺することにより、その孤独憂愁を癒やし逃避しようとしたのである。

1812年の春と夏の間、詩人の Caroline への熱情は、すっかり燃えつきてしまった。そして Caroline へ書き送った。

“貴女は小さな活火山だ。貴女の心には——かわいそうな Caro よ——あなたの血管の中には あつい溶岩流が流れている。

しかも それが いささかでも冷えてくれと願うことすらできない。私はいつも貴女を、最も総明な、好ましい、奔放な、あらっばい、困惑させる、危険な、魅力的、かわいい女性と 思っています。”

しかし 5月19日 に こう書いた。

“この夢は、この2ヵ月余の熱狂、無我夢中は 消え去ってゆかねばならないのです。”

それは訣別の意を書き送ったのである。

事實は——

バイロンが、自らのスキャンダルを、作りつつある一方、カロラインの積極的、押しつけを好まなかったこと、の理由によるのである。

詩人のロマンスは、しかしつねに、彼の一方的エゴにより清算される。このことも見逃せない。

彼は 二人の仲が冷えきった今、爪を噛むような無為、倦怠を覚えるのみで、むしろ、カロラインの ‘obstinate little neck’ しつこい 小さな首を ひねり、ちぎりたい衝動にすらかられた。

Caroline は、食卓で、Byron が 他の女性によりかかるのを目撃したとき、癪をたてて 自分の酒盃を噛みくいだいた。そして、人前で、あからさまに、自分の pubic hair (恥毛) を数本ぬきとって バイロンに与え、バイロンのものを、お返しにしてくれるようにと強要した。

バイロンをめぐる女性の中で 誰一人として、外遊中、彼とのロマンスのあった、トルコの、ギリシャの女性の中の誰一人として、これほど無遠慮、奔放、

無鉄砲な女性は、いなかったものを——と、詩人の心は 冷えゆく思いで、カロラインから離れてゆくのであった。

Caroline Lamb は、名門の、才たけた美しい、うら若き、人妻にして、しかし、その 奔放な、おきゃんな、強烈な個性には、実に 溶岩流が hot にその鮮血の中に流れている 情熱的、活山火の如き、まさに、火の女であった。

かかる狂態の中にも、Caroline Lamb という女性は、熱血詩人 バイロンが、束の間の——詩人のロマンはつねに‘束の間’であった——ロマンとして燃えつきる、その日まで狂おしく愛した相手として いかにもふさわしい熱血的女性、魔女、妖精 であったこと、その点、吾人は、あらためて、カロラインに 驚歎の目を向けたくるのである。

そしてそれは、“Childe Harold”が——Byron が——いかに多くの女性が耽溺するほど、魅力的、憧憬的であったかを如実に物語るものである。

Caroline は、少なくとも二度にわたって、詩人に、‘駢落ち’のことを迫った。一度は、彼の部屋に変装して入り込み、今一度は、彼の知人の外科医の家で しきりと 駢落ちのことを、詩人に決意すべく迫った。

彼女の義父にあたる Melbourne 卿も、彼女には、ほとんど手をやいて 困り果ててしまった。そして、詩人がもし、彼女と駢落ちするようなことがあれば 詩人の生涯は、彼女のために 破滅するであろう と言った。

Lady Bessborough は結局、この‘小悪魔’を Ireland へと追放するのであるが、カロラインはすぐに舞い戻ってきて、突如として、散発的に 復讐を試みる。

バイロンの ^{ひとがた}人形 をつくり、かがり火でこれを、呪いながら燃やし続けるのであった。

Caroline との恋愛沙汰が、まだ初期段階にあつたころ、詩人は、William Lamb の実の従妹にあたる Anabella Mibanke に出合った。

この総明な、^{ういうい}初々しい20才の女性は Seaham の Durham Home でこのシーズンを過すためロンドンへやって来ていた。

しかしこの時点で、Byron が、Anabella は、生涯の伴侶として、自分には不適當で、ふさわしい女性ではないという認識があつたらよかつただけれども、双方にとって、実に皮肉な運命の出会いとなった。

Annabella は ‘a blue stocking’ (インテリ女性) であつた。この種の女性は、詩人好みではなかつた。

彼女は数学を専攻していた。その故に人生問題への取り組み方は終始、系統的、組織的、理性的であり、“移り気”な詩人には不向きであつた。

Caroline と正に 対照的女性であつた。しかし最初の二人の出会いは、一時的にせよ、二人が性格的には相容れないものがあることは全くわからないような、お互ひに強く相引くものがあつた。

詩人が最初 彼女に会つたのは、カロラインの主催したダンスの早朝練習会の集いにおいてだつた。それはドイツから入ってきた、新しい、めまぐるしいダンスのステップの練習会であつた。1812年3月25日のことだつた。

足の悪い詩人はうまく踊れないので、この官能の満足にふけるワルツを只、眺めているだけに、甘んじていなければならなかつたが、ここでは、初めて踊るパートナー同志がお互ひに腕を組合うことができる場である。

透けてみえる^{けいら}輕羅を身にまとう官能的美女の誘惑的ワルツよりも、この瞬間の詩人のムードは、つつましやかな Milbanke にすっかり傾いていった。

詩人は——Milbanke 嬢の、身長に申し分のない姿態、亜麻色の髪、リンゴ色の頬、広い知的なひたい、真剣な表情、すべてがピリッとしていて詩人の目に映つた。

彼女が貴族の嗣子で、将来貴族たる既得権をもつ身分であることも、詩人には格別の、魅力と関心と好奇心を十二分にさそつた。

“彼女は格別、私の好奇心をひいた”と後に告白している。

Anabella Milbanke としても、内心、“私の知っている誰よりも、Byron 卿は、話し上手な、楽しい方だワ”と驚歎し、すっかり詩人に圧倒されてしまった。

彼女は、Childe Harold を貧^{むさ}ぼる如く一気に読了し、その主人公がもちろん Byron 卿自身であることをすでに察知していた。

詩人が高貴な心の人でありながら、非情にゆがめられた心の持ち主であること、自分の犯した罪を認めながらも、その悔いの^{かげ}翳りを、憂愁を、他人の助けなしには、独力では、自分のふるまいと気持の軌道修正——その決意ができない人だと判断した。

Anabella は——

“Byron 卿が、私の心を引き留めるためには、彼に欠けているものは、ただ、温かいいつくしみ の心、だワ。そしてそれは、むしろ私自身のもち味であり、Byron 卿を救うために私の方から、逆に、さし出さねばならないものだ、そうしてあげたいワ”と考えた。

彼女は詩人があるパーティーの席上で

“ここに自分自身の心を勇気をもって、のぞき込もうとする一人の人間がいることを、あなたは お考えいただけますか”と誰かに 話しているのをめれ聞いたとき、ロマンスに憧れるひたむきな人間として彼女の心もまた、詩人に傾いていくのを感じた。

“私が彼のために、彼が勇気をもって、彼の心をのぞきこむことができるように、彼の心を浄化してあげたい”と彼女は考えた。

バイロンが彼女に向かって

“私には、この世に一人も友達がいないのです”と言ったとき、彼女の献身的気持は完全にまで高まってきて

“私は この孤独な人のために献身的友となってあげることを誓うワ” とひそかに心につぶやいた。

孤独の人？ Annabella の夢多かりし、春秋を奈落の底にたたき落すべく襲った嵐——のちに Annabella は Byron と 結婚—離婚の悲劇のヒロインとなる——ともいうべき、詩人との出会いであった。

彼女の悲劇のルーツを探るためには、この数学的、分析的、冷徹な思考が帰納した“彼女のバイロン像”を究めねばならないであろう。

彼女の、総明な、理知的な、頭脳の中で、Childe Harold なる人物がどの程度まで Byron 卿と同一視されたのであろうか ということ了我々は理解しなければならぬ だろう。

‘孤独の人’という語を Annabella が使用したとき、彼女の脳裏には、いつも、Childe = Byron なる等式が描かれていた。

だから 彼女の心は、Childe Harold なる神話的謎の人物即ち Byron 卿にすっかり共鳴し、魅せられ、傾倒していったのである。

“Byron 卿には 手を出すなヨ。あとの崇^{たた}りが こわいぞヨ。”

詩人の生涯、つねに、詩人のかげで、私語^{ささや}かれつづけた文句である。

“呪われた魔性バイロン”の姿は今や Annabella に対峙した。

Caroline が Byron を知って一人の狂女と化したよりも、或る意味では、もっと worse な、大きな悲劇が、更に引き続いて、もう一つ 生れつつあった。

すべての人がそうであるように、Byron にも 謎の神秘なる奥地——彼の内なる孤独地帯——現実の、そして、想像上の、罪悪の秘密が、厳然として存在した。

たしかに、一個の詩人として 彼のすべての感覚は最高度に高揚されていた。

孤高バイロン！ 故にバイロンは、冷然と女性を観た！

バイロンが永遠の愛を誓い得た女性が——彼の生涯、星ふる如く、数多くの女性遍歴を重ねながら、描かれた絢爛たる愛欲の絵巻の中で——ただの一人でもいただろうか？

詩人自身は 別の意味で “自分は Childe Harold ではないのだ。” Childe は 全くちがう架空の人物であることを強調する。

“私が世に送り出した Childe Harold なる人物に 私はなりもしないだろうし、なりたくもない” と述べている。

いかにも 彼の性格の多くは きわめて非 チャイルド的であった。Byron は 性格的に秘密主義であるどころか、全面的に 自分を抑制することができず 気ままに 傍若無人に振る舞った。彼の友人達は 彼の心の中で、活発な、遊び好きの、いたづら好きの、ひょうきんな、大声を立て笑ひ興ずる 遊び仲間として、つねに、どんちゃん騒ぎ を演じていた。

Byron の Childe 的 ‘暗さ’ と 非 Childe 的 ‘陽性’。その中間で、この詩人の、諷刺的天分が微光を放つのである。

この、諷刺的天分は見逃すことはできない。Byron にとって、諷刺、嘲笑こそ 鈍ることのない、唯一の武器なのであった。

“人生は 馬鹿げていて、はなしにもならぬ！” と 口ぐせに言った。

“AB が CD に移り変わるようにと、笛太鼓で私がふれ廻ってのち 私がやっと、たどりついた、この定理 theorems——人生は馬鹿げていて、はなしにもならぬ！”

私は、いつも、そこにたどりつく、そして生涯 私は そのことを 怖れねばならないでしょう。” と Annabella に語った。

Annabella は 今、生涯を通じての、最も重大な、そして fatal な局面に立たされていた。

もし——

Caroline Lamb——Annabella の従姉——が Byron との初期の友情のことを述べた、詩人の意見を 彼女にもらしたとしても、Annabella は、それは軽卒な意見として聞き流したであろう。

Byron は Caroline をなだめるために、書いた。

“Annabella は、あまりにも善良だから ‘落ち込んだ魂’ をもつ私には とても理解できない人だ。そして私は、彼女がもっと欠点のある女性なら、彼女をもっと知りたいと思うだろうけれども……。”

Annabella には 軽卒な点 は、いささかもなく、そして——Childe Harold 的 人物には、たのしき、おもしろき は、少しも なかったのである。

Childe Harold が世に出て Annabella がこれに心酔したこと、詩人が自分のゆきかたを変えることになりゆくことは全く別問題であったので、Byron の天分が 彼女によって束縛されることは、あり得ないことだった。

この季節の終わるころ、詩人は 薬効性鉱泉水を飲み、Chaltenham に移り住んだ。

Caroline——今や、詩人にとって、彼女とは、我慢ができない、しかも、抵抗できない、ジレンマ状態の仲であったが——から ^{のが} 逃れ得て、詩人は、彼女の従妹にあたる Annabella——非凡な科学的頭脳の持主、そして美しい姿態と無垢な表情をたたえた——にめぐり会った。

Elizabeth Milbanke, Lady Melbourne は、Annabella の父 Ralph Milbanke 卿の姉である。

62才にして、今なほ美しい、淡いブルーネットの、魅力に溢れ、茶目っ気たっぷりの、おきゃんな、やんちゃな、18世紀英国の典型的な女性である。

彼女は過去において Lord Egremont と情を通じ、彼女の次男の William の父親が、Egremont 卿か、それとも、Melbourne 卿か、どちらかはっきりしない——それほど、巧妙に浮気上手の女性であった。

英国社交会貴族の遊び上手の慣習の中にあつて、一際、群をぬいた典型的な女性であった。

詩人は この ^{アスパシア}Aspasia——ギリシャ、アテネの遊女、Pericles ベリクレスの情婦——の現代版である、この超絶倫の精力の女性 Lady Melbourne にたちまち、うっとり魅せられて、早速、彼女に手紙をかいた。

“もし貴女がもっと若かったら、私は貴女を恋して 気が狂っていたであります” と。

Byron は Caroline と 狂気の恋愛沙汰を続け、世の^{ひんしゆく}響響を買ったが、この Lady Melbourne (Elizabeth Milbanke) は、慎重派の代表であった。

もし——

詩人を、Caroline との泥沼から救い得る女性がいるとするならば、この Lady Melbourne をおいて他には誰もいなかったらう。

Byron は Annabella との結婚により、自分の心の憂愁と暗黒、倦怠から脱出したいと考えた。

Lady Melbourne は その考えに同意した。そしてその件を巧みに^{めい}姪の Annabella に切り出した。

Annabella 「は 理想の夫として どのような男性を望んでいたのだろうか。

伯母の Melbourne から、この縁談を持ち出されたとき Annabella は しっかりとした口調で “私は理想の夫として たくましい感情が、つねに責任感と

理性によって支配されているような男性を望みますワ”と答えた。だがしかし、それは Byron を意識して、Byron へ向けられたことばではなかったようだ。

Melbourne は少しムッとしたが “貴女は只、爪先で立っているだけだワ” と 当意即妙に応じた。

Annabella は、Byron が Melbourne 夫人を介して、非常に固苦しい求婚の申出を書き送ったとき——10月8日の日記の中で、Byron の性格を分析した。そして12日に Byron 宛に拒り状をかいた。彼女は今でも、なお、Byron はまぎれもなく Childe Harold と信じ込んでいた。そして Childe Harold とは——心は絶えず不安に揺れながら、つねに悪と善との間を低迷し、ゆがめられたプライドをもちながら、それを善にみせかけようと偽装している人物——であると推断した。

Byron が 自分の過ちを告白し、懺悔した人に対しては 極端に謙虚であるということを知ったにもかかわらず、しかし、Annabella は詩人の求婚の申出を断こと断することに決意した。Annabella は Byron に対して、結婚による家庭生活の中で 自分を幸福にしてくれるであろう強い愛情を期待することができなかったのである。

Byron の求婚の決意が激しいものであったと同様、Annabella の拒絶の意志も不動のものであった。しかし Byron は、Lady Melbourne に対して、心の平静を装い 手紙を書き送った。

“令嬢 Annabella への、貴女の御尽力を心から感謝しております。令嬢 Annabella の拒絶の決意は 私が困惑するほど 固いものです。いや、むしろ、私と Annabella は、並んで延々と無限にのびる平行線をたどるようです。”

Annabella の返事は、全く、直截的であったが、Byron に対し 終始、誠実な態度を貫いた。

それはとも角として、Byron にとって、Annabella との結婚による最大の魅力とは—— そのことによって、彼が Lady Melbourne を自分の伯母 (his aunt) とすることができる ことにあった。

11月 Melbourne に手紙をかいた。

“私は Annabella との仲が絶たれたことを、むしろ内心喜んでいきます。Annabella を私が思う心は 例えば a cold collation (断食中、許される軽食) です。しかし私に必要なのは むしろ hot supper で フーフーとふきながら もりもりと腹一ぱい食べたいのです” と。

しかし その hot supper は 既に新しい愛人によって用意されていた。そしてそれを Byron は もりもりと 貪る如く 食べ、かつ 飲んでいた。

新しい愛人とは the Countess of Oxford オックスフォード伯爵夫人であった。貴族的 Whig 党のパーティーで 詩人は たびたび彼女に会っていた。彼女は熱烈な過激派 (the Radical) 党员として——彼がイタリーに赴く日までは——、彼の唯一の、政治的関心の強い愛人、であった。

生粋の Scot として 自由思想、自由恋愛の研究に心血をそそいできた。過激派党主、Francis Burdett も彼女の愛人の一人だった。そして彼女の娘たちも彼女と同様、美貌で いわゆる Harleian Miscellany として有名だった。

彼女は 魅力的、秋9月のシーズンを 彼女の館へ滞在するよう 詩人を招いた。

Lady Oxford は今、Byron にとって 魅力的愛人であったが、クレオパトラの如く ‘40才の女王’ であり Headfordshire の Eywood の田園の彼女の館を訪ねるとき、そこが in a sea of trouble わづらはしき憂き世の中の——ロマンチックな国 であった。

11月9日、執拗に迫る Caroline と どうか 詩人は絶縁することができた。それは、彼女が Lady Oxford に対して 疑惑の怒りと 批難の罵声を—— Sturm und Drang なる、1760年代流行の、独文学 style で、特にカロライン

は造詣が深かったのだが、それを駆使して、ながながと——浴びせかけた後のことであった。

Byron は返事を書き送った。

“Lady Caroline! 私達の愛は二人っきりで独占できる仲ではないのです。私の愛情関係は多忙なのです。私は今、別の女性を熱愛しています。私は最早や、貴女の愛人ではありません。”

かつては彼女を ‘absurd’、だが 魅力的、かわいい人 と呼びながら、今や もう、‘absurd’ であり、且つまた、最も ‘contemibly wicked of human productions’ けいべつすべき最もいけない女 と吐きすてた!

Caroline が あへて Byron の髪の一房を要求したとき彼は Lady Oxford の髪を、自分の髪の代りに Caroline に送り届けた。

Byron の対女性観の冷然たる、性的アナーキストの一面を、まざまざと 見せつけている。

Caroline は、この手紙を脚色し、‘Glenarvon’ と題して、ロマンチックな、非常識だが機智に富んだ小説として 出版した。

1811年の秋、ポッカーリと、大きく口をあけた詩人の心の虚無感は、その翌年ふたたび、どっと襲ってきた。

とに角、是が非でも旅へ出なければならないと思う。1813年6月、地中海へ旅立とうとする Oxford 夫妻と共に行くか。Lord Sligo と共にペルシャへ行くか。Hobhouse と共にロシアへ行くか。と計画するが、そのどれも 実現の運びに至らなかった。

“俺は、うさばらしの女性遍歴とは、いづれにしても 絶縁せねばならぬだろうか?”

Byron は 明日の日を考える。

そのとき、突然 Augusta がロンドンに、押しかけて来る。すべてのバイロン家の一族がそうであったように、彼女も経済的苦境に立っていた。

彼女の家は New Market の近くの Six Mile Bottom にあったが、競馬好きの夫故に、三人の幼な児を抱え、どうしても、持ちこたえることができなかった。

Augusta は、詩人が、すべて東洋のロマンスから引き出すことができるような、彼好みの、官能的優しさ、黒髪明眸、ギリシャ的ひきしまった口許をそなへた、まだ29才の若さであった。

Like Leila following her Giaour

侍女のように、従順にそして献身的に、詩人に付き添って行動した。そして詩人を最も身近かに引き付けたのは、彼女が Byron の分身だったからである。だから彼女も Byron のはにかみと笑ひをもっていた。

“Do you think there is one person here who will dare to look into himself?”

と Byron はかつて問ひかけたことがあった。今、Byron はあえて Augusta の心の中をのぞき見た。そしてそこに自分自身の姿を見た。

Narcissus^{ナーシサス}——ギリシャ神話で、水中に映った自分の姿に憧れて死んで水仙化した青年——は詩人の一面であり、詩人は、それだけで充分、^{しあわせ}幸であった。

Byron は Narcissus の如く、なぜか、Augustus と共にいるとき、心が和んだ。しかし、彼には ‘forbidden love’ 禁じられた恋 という罪の意識が絶えず脳裏をかすめ 離れることはなかった。

詩人は Annabella に向かって “人生の最大の目的は sensation である” とやがて告げることになった。しかし 詩人の心の中には 最初の感覚ほど楽し

くはない、もう一つの感覚——肉欲的罪悪感——が潜んでいた。

Augusta は夫に虐待されて、彼女の 'Baby Byron' (詩人のこと) が望むならば、どのような行動であろうと、それに従^ついてゆくであろう。今 Augusta が 詩人の愛人であることは公然たる事実であった。

詩人の犯しつつある罪に Augusta がただ、黙^つ従したことは、詩人の罪の呵責を募らせていったにちがいない。詩人は彼の Guss, his 'goose' (詩人の後につきまとう Augusta) を何処へ連れて行こうとするのだろうか？

この Augusta の愛称はたちまち世間の批難的となった。

8月18日、彼の心を打ち明けることのできる友、Lady Melbourne に、Augusta との仲を打ち明けて心を和らげ、罪の意識を解こうとしたが、その文句をしたためることが、どうしてもできなかった。

“打明けたい！ だが、止^まそう！” と筆をおいた。

過去の何れの場合よりも、窮地に追い込まれた、その心境を 四日後に Moore に書き送った。

“多くの女性群と共に暮すことはできぬ。それなのに多くの女性なしに生きることは、不幸である” と。

Moore に意中を打ち明けたその日、沈黙を守っていた Annabella から、求婚をはねつけた非礼を謝罪する手紙を受け取った。しかしそれは友情と忠告の旨を述べた長い手紙であったが、“仮想上の、報いを求めない愛情” のことを述べた彼女の動機については全くふれていなかった。

“私の心の最も強い愛情は 報いを求めるという希望を伴うものではありません。あなたが いつまでも あなたの気持を占拠し、あなたの理性を貫く一つの目標を持たれることを望みます。”

この忠告は 皮肉にも、詩人には 全くピタリと適中するものであった。

Augusta は実際、詩人の気持を永久に占拠した、そして、彼は遂に、Melbourne に自分の立場を打ち明けることにより自分の理性を行使しようとした。

His Aspasha (ギリシャの遊女) なる Lady Melbourne は、詩人が“駈落”のことを考えていることを知ってゾットした。どうしても、そうしなければならぬのなら、Augusta は連れないで外国へ駈落しようと歎願した。しかし詩人はどうしてもそれは約束しよとしなかった。

実は Murray に、Gibraltar—Minorva—Zante へと航行する客船の情報を知らせて呉れるように既に頼んでいた。

“私には、一人の伴侶つれが在るいんだが——”

と書き、その報を心待ちにしていた。

この決定的瞬間、幸運にも、ケムブリッジ時代の友人 James Wedderburn-Webster が Yorkshire の Aston Hall の、彼と彼の妻、Lady Francis の許へやってきて逗留するように勧めて呉れた。

この館は、実は、詩人の父 ‘Mad Jack’ Byron (気狂いジャック・バイロン) が Augusta の母——そのとき、他の男の妻であったが——を連れていった、その家であった。

今、その息子たる詩人は、Colonel Leigh リー大佐の妻、Augusta との螺線状情事を切り開くために、Webster の妻 Francis を必要とした。

Webster は 愚者であり、Francis は 愚かしかった。それでも、Aston への二度の訪問は——1813年9月下旬と10月初旬——Augusta との破局を引き延ばすのに役立った。

“Bold Webster”——奔放なウェブスター——と、詩人は彼に対して、Nick name を献じた。Webster は、妻への不貞ゆえに、久しく、妻の愛情を失っていた。

Francis は、彼女の道徳的センスの如く、蒼白い美しさをたたえた、退屈な、だが、つつましい若妻で、詩人にとって 魅力的タイプの女性ではなかったが、彼女の方では、詩人にひかれ、心の支えとしたのは もっともであろう。

数週間にわたり Augusta のことで、すっかり疲労した後で そと Webster 家を訪れたことは 詩人に心のやすらぎを 少しでも与えてくれた。

Lady Francis は、Byron の無意識の動きには鈍感であったが、二人の仲は、急激に深まっていった。結局、彼女の肉体に詩人は、すっかり魅了されてしまった。

彼女は 詩人の手中に落ちるだろうか？ 彼女が bible——異教徒の聖書——で、はかれるのであれば、何の支障もないのではないだろうか？

10月中旬、その試練の日がきた。

Webster は、詩人と Francis が billiard room で二人っきりになることを黙認した。二人のゲームの最終ラウンドを執行すべく Newstead ニューステッドで午前2時に会った。ここで詩人は それとなく 誘いをかけた。Francis は積極的だった。名将 Drake 提督——スペインの無敵艦隊を破った英国の勇将——の如く大胆に 二人は 事を執行した。Francis は 詩人に自分の愛を打ち明けた。そして一見、自分を誘惑しないでほしいと嘆願するが如く、振る舞い一つも 身体ごと投げ出した。

その結果につき 詩人が Lady Melbourne に宛てた報告では “私は彼女を割愛した”——I spared her!——とかき、なかば騎士的であり、なかば喜劇的でもあった。しかし、引き続き Melbourne に書き送ったこの情事は、一連の火花の如く 烈しいものとして書かれており、まだ完全には終わってはいなかった。

Lady Francis は、詩人が、その肉体にのみ、彼女の Fanny (性器, vagina) にのみ、強くひかれた女性であったのだろう。

‘墮落’ のことは 終始 詩人の念頭より離れることなく、執拗しつようにまつわりつ

いていたが、その相手を選ぶとすれば、結局、Lady Francisこそ ^{かつこう} 恰好の伴侶であったかもしれない。

Gibraltar—Minorca—Zante すべてが sturm und drang であった。

詩人の身边には ロマンズの嵐が、その生きざまの中でこの他、強く律動した ‘Yawning’ と ‘love affair’ の iambic meter を奏でた時代であった。

1815年11月、ふたたび ロンドンに舞い戻った。詩人の名声は、既にひびき渡り、今までよりも もっと派手やかにもてはやされたが 詩人の心は千々に乱れていた。

昼間の ‘fete-ings and buzzing’ 酒宴と ‘らんちき騒ぎ’ が終わると ‘The Bride of Abydos’ の執筆に心血をそそぐことに、ほっと心を和らげることができた。それに一週間を要した。

この ‘アビドスの花嫁’ は トルコ風の物語詩としてかかれたが、美しい pasha の娘、Zuleika は Osman Bey との結婚生活に満足している。が 異母兄 Selim から強い愛情を打ち明けられるや 自由を求めて彼のもとへ走る。Selim は Hellespont で射殺され、Zuleika は失意の果て死んでゆく。Zuleika の4分の3は Augusta を、4分の1は Francis を描いたものである。彼女の父親は全面的に Ali Pasha のことであった。

一週間で the Bride を一気呵成にかきあげた後、John Murray に出版を頼むため、この物語の主人公 Zuleika と Selim との間柄を、従兄妹（いとこ）の仲に、変更した。1813年12月13日 出版以来、直ちに6,000部を売り尽くした。

この詩作活動の後、ちょっとした情事をもつ。1813年11月13日以来 書き綴っていた 日記の中で 12月7日に

“眠ること 食べること、そして暴飲、^{たが}がをしめ、^{たが}がをゆるめる生活、私にとって はっきりとした生活が どれだけ残されているのだろうか？” と書

いた。

詩人は 創作（詩作）活動によって 生きながらえているのだった。12月8日、己が罪を、活気なく綴りゆくことはやめにして、詩作活動に励むことを決意する。

“The Corsair” の詩作を始める。10日で書き上げた。

そして一方、ロマンチックなスリラーものに飢えている大衆読者のために、魅力に溢れる散文詩をも創作した。

Conrad the Corsair は 彼の美しい Medora をのこして Seyd Pasha 帝国への侵入のためおもむくが、Seyd にとらへられる。しかし Seyd の女奴隷 Gulnare の裏切によって救い出される——Gulnare は、Conrad への愛のために睡眠中の主人を殺害したのである。彼は、Gulnare を連れて故国へ帰るが、Medora は 悲しみのあまり 謎の死を遂げたことを知る。

Byron 的 奴隷的女性が 二人描かれてる。

The Giaour の Leila, と The Corsair の Gulnare は、いずれも、Selim のため、Conrad のため、主人を裏切る。

いずれの場合も、主人公は、その女奴隷の自分への溺愛を なかば悔いている。

Selim はいう——

‘しかし、ときに、悔ゆるとて無益なことだが……彼女がふたたび私を愛しなかったらな……’ と。

Conrad は 溜いきをもらして、Gulnare の唇が自分の唇に重なるのを許すとき、何か不吉な胸さわぎを感じた。

いずれも、自らの罪に苦しむ Byron 自身の姿である。

Medora が死ぬとき Conrad も Gulnare も姿を消す——しかし幸福な恋人

としてではなく。というのは Conrad の唯一の徳は、彼の[●]名[●]誉[●]の[●]意[●]識[●]であり、そしてそれが、彼のために犯された Gulnare の罪によって拭ひ難いほどに汚されてしまったから。

そして、この詩の最後の Couplet で Conrad は^{くう}空の中に消えてゆく。

Byron にとって、^{くう}空に消えてゆくことが、自らの問題解決とはならない——詩人のかかえた問題はそんな生やさしいものではなかった。

Byron は自ら、笛、太鼓を打ち鳴らし、Caroline から Annabella へと、そして Lady Oxford から Francis へと 情事の相手を目まぐるしく変えていったが、そこに問題は何一つ解決されることなく——

どうしても 脳裏から離れることができない問題、執拗な一つのチャイムがいつでも 耳鳴りとして ひびき続けている。

それは Augusta のことである。

貴公子 Childe Harold は ^{いつく}何処へと 漂うてゆくのだろうか？

Grand Tour(1st) よりの帰国後 詩人をまち受けていたものは ^{はな}華やかな^{うたげ}宴であった。しかしすでに 詩人の、身も、心も ずたずたに引き裂かれ ポロボロになった^{へいり}弊履の如き^い生き^{さま}態は もはや 救い難いものであった。

濁流の中を棹さして^{たく}遅ましく己が運命を切り開く勇氣はなく、笹小舟の漂い、さすらうままのすがたであった。ただ心の中で‘逃避あるのみ’と絶叫する黒い影におびえていた。

‘華麗なる憂愁！’ そこに^く練り^{ひろ}展げられた [●]愛[●]欲[●]の[●]絵[●]巻[●]は 詩人の逃避のすがた、心の焦燥の影であった。

自分の、その影をうつすべく、烈しい詩作をすることによって かりうじて、せめてもの、ひとときの[●]安[●]ら[●]ぎ[●]を求めた。

逃避を、安らぎを、求めて、詩人は、Augustaへと走る。そして Annabellaへ よりすがろうとする。必死の悶える日日——そのように 長くは続かないであろう。！ 詩人はそのことを熟知していた。そして、遂に、破局が、……
(次章へ続く)

付記：本稿の作製に、Elizabeth Longford：‘Byron’より貴重な資料を多々、仰いだことを感謝し特記する。

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford: Byron, Hutchinson.
- 2) Ernest Hartley Coleridge: The Poetical Works of Lord Byron; Lewis Prints.
- 3) Francis, M. Doherty: Byron.
- 4) Leslie, A. Marchand: Byron's Poetry, John Murray.
- 5) John, D. Jump: Byron, Rontledye & Keygan Paul.